

も清きを去るべし、まかあれば清き心の友は何かあらん、妙なる香をかぐにしく物なしとて、花をつむあしたぬかをつくよるのいとまたゞこをたきて、かたもひの底つ心をすまし、烟の末をながめて、世の中をおもひつゝ、あらたまの年月をふるめり、かのいほちゞのさはなる香の木を、たかきひくき人こゝろざしおくれるまにゞもてあそばへば、まらまくもせでしり、わかまくもおほえずてわき得にたるは、もとより塵にまじらはぬ清ら心のわざになんあるこゝに人々香の木らもて、おとりまさりをまげつらふ事あり、むつきのはつかばかりに、高き家の君たち設などしたまひて、上人の事わらん事をこへり、そのおのがまゝのいへる詞、上人のことわれるころしらびを、眞淵に去るすべしとあり、おのれは香をわかつかふぐゞしをももたらねば、すぎにたるや、たらはすや、御世の名は明和としは四とせ、月はむつき。

〔春湊浪話下〕伽羅

香合をなす式は、左右を分て焼出し、其判をなして勝負を付る事、歌合の例の如し、文龜のはじめ志野宗信が家にて香合をす、其判のことは、逍遙院のおとゞ書せ給ふ、又其焼出す式は、邦尊親王の五月雨の記にくわしくみえたる事なるに、いつよりか其式はすたれて、今は回茶貢茶の式のごとくなして、伽羅を焼出し勝負をあらそふ、是を十炷香といふ、其上にさまゞの作り物をこしらへ調じて、盤上に并べ立て盤香といふ名所香、矢敷香、競馬香などいふ類なり、ことなど出来て、専ら世に翫ぶことにて、今はおさなきもの、其式を知事なれば委くは書ず、再びこの式を茶にもうつし學ぶことと有といへども、昔の十服茶などいふ式のごときにはあらず。

〔香道大意〕翫香は凡て爐を手に取りて鼻先にあて、聞くをいふ、此の翫香中に一種聞、焼組香、聞名香合、組香等の品々名目ありて、其作法各別なり、然るに組香を翫香中の尤下品なる物として、又此の組香の中にも眞行草の三ツありて、眞の組香を嚴儀の香と云ひて、其の式を嚴にするな